

共感覚に基づく比喩表現について

— 「薄い」の多義性をめぐって—

邱 嫩婷

1. はじめに

「共感覚」とはもともと感覚心理学用語で、ある刺激に対してその本来の感覚に他の感覚が伴って生じる現象を指す。言語学では、特に人間が五官（目・耳・舌・鼻・皮膚）を通じて感じることのできる五感（「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」）の中である感覚分野のことを表現するのに他の感覚分野に含まれる語を比喩的に用いることを「共感覚的比喩」¹という。

共感覚的比喩の特徴について池上（1978）は次のように指摘している。「共感覚というのは人間の知覚面での特徴であり、人間の文化的というよりは生物的存在としての共通性が強く現れてくるから、異なる言語間に共通の共感覚的表現が出て来たり、どの感覚からその感覚に転用されるかという点に関して共通の傾向が認められたりしたとしても、特に不思議ではないわけである²」。また亀井他（1996）によれば、修飾語と被修飾語が異なる感覚分野に属する共感覚的比喩表現は「比喩の一種で、意味変化の原因の一つである³」と言ってある。次の例で見たように、共感覚的比喩表現も形容詞の意味的転用の観点から研究されてきた重要な現象である。

- (1) a. 薄い味 （【空間】から【味覚】への転義）
- b. 薄い色 （【空間】から【視覚】への転義）
- c. 薄い声 （【空間】から【聴覚】への転義）

したがって、本稿は、次元形容詞⁴「薄い」の多義構造について、感覚転移の現象をふまえた上で、「薄い」の表示する多義性を中心に分析し、基本義からそれぞれの新しい別義を生じせしめる要素が如何に基本義とその新たに発生した意味との間に存在する意味関係と係わっているかを、認知意味論の理論に基づいて分析を行いたいものである。また、方法として主に文学作品に見られる日常語レベルにおける共感覚的比喩表現を検討対象としながら、「薄い」の意味構造を究明したい。

2. 共感覚的比喩の特殊性について

本稿を進める上で共感覚に基づく比喩の研究について、少し触れておくこととする。

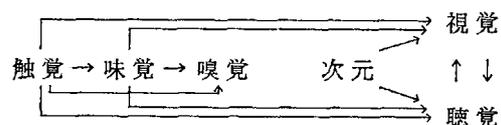
謝豊地（2002）⁵は「共感覚比喩はメタファー（隠喩）、シネクドキー（提喩）、メトニミー（換喩）などの一般的な比喩とは異なった特殊性を示す」と指摘した。その特殊性の第一としては、「一方向性」を示す性質を有することである。第二の特殊性としては、原意味から新たに派生した共感覚的比喩表現は両者の間に意味的な「類似関係」や「隣接性」が存在することである。

一方向性の研究に関しては、英語や日本語においてはすでに詳しい研究結果が発表されている。英語ではS.Ullman（1957）やJ.M.Williams（1976）によるものが著名である。反対方向の用例はあるが、喩える側から喩えられる側への感覚の方向性が一定しており、「触覚→味覚→嗅覚→視覚→聴覚」という低次感覚から高次感覚への一般的な方向性があることを示している。

一方、日本語における共感覚的比喩表現が一方向性を示すかどうかに関しては、同様の傾向が見られることが国広哲弥（1989）⁶によって指摘されている。（図1を参照）

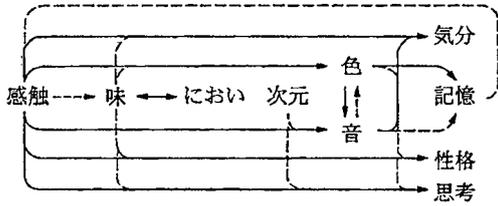
そして、感覚転移には五感の間の感覚的転移のみならず、感覚から非感覚への転移現象も観察できる。例えば、「薄い合格の見込み」、「薄い記憶」、「薄い意識」の場合、喩える側が感覚で、喩えられる側が非感覚で、感覚から発達の度合いがもっと高い認知へ転移されることにより成立した比喩である。

楠見孝（1988）⁷によれば、感覚から思考、心的活動などの分野への感覚転移はすべて共感覚的比喩表現と見なされ、楠見によって示された、日本語を検討対



〔図1〕

象とした共感覚的転移の図は一層拡大した。(図2を参照)



〔図2〕

以上、共感覚的比喩を巡る先行研究に関して考察した。次に、「薄い」の意味的転用に対して考察を進めていく。

3. 「薄い」の多義性に対する分析と考察

「薄い」に対する意義素分析について、国広(1982)⁸では

ウスイ：〈長さ〉幅〉厚さという長さの関係にある立方体において、ほかに限定的な条件がない時、厚さの値が標準値より小さい)

のように記述する。一般的に、「薄い」は「薄い板、薄い紙、薄い壁、薄い本、薄いノート」のように、面状、体状の厚みを表すのである。そして国語辞典の記述を見れば、「薄い」は、面積、体積という空間の他に、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、程度、可能性などを表現する意味を持つことがわかるが、個々の意味の羅列に留まり、意味相互の関係付けが明らかでない。本研究では、より具象的な把握を目指して、実例から得た「薄い」の意味を空間、密度、色彩、光、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、感情表現などのように、項目に分け、意味分析を試みたい。この節の用例は、主に中村明編『感覚表現辞典』、青空文庫及びインターネットで公開されるホームページよりの引用である。

まず、「薄い」の基本義を考察する。

① 空間を表す基本義

「薄い」の基本義に関しては、〈面状、体状に対する〉〈視覚的に知覚されて〉〈表と裏との隔たりが何かの基準より小さいさま〉という意味特徴によって形成されたプロトタイプを「薄い」の基本義として用いることにする。この基本義には否定的な意味は含まれない。

(1) が、唇は冷ややかなほどにうすく、鼻の形も、特にいいというほどではなかった。

(三浦綾子「石の森」)

(2) その引き締まった円顔の中にある小さな鼻は、まあ何と云う肉の薄い、透き徹るような鼻でしょう！
(谷崎潤一郎「痴人の愛」)

(3) その淡い卵色の艶をおびた薄い皮膚の下で
(大江健三郎「芽むしり仔撃ち」)

(4) 手の中に置くと薄い三角形のガラスが氷細工のように光を集めていた。

(高樹のぶ子「その細き道」)

上の例で見たように、物が面状、体状の厚みが少ない形を「薄い」という。客観的な厚みの少なさを言うだけで、広がりには言及しない。また、どんな量で薄いというのか、特定の基準がない。何かを比較基準になる他のものと比べてその基準を下回った場合は「薄い」というのである。「薄い」が空間を表現する場合、『厚い』は対義語になり、「薄い-厚い」という対義関係が想定できるだろう。しかし、厚くなれば薄い、ということは成り立つとは限らない。そして、慣用的な言い回しでは「唇が薄い」というが、「唇が厚い」とは言わないようである。

② 密度・濃度を表す派生義

次に、派生義②としては、

(5) (原根警部は) 痩せて、頭も少し薄くなりかけている。
(五木寛之「夜の斧」)

(6) 高原の牧場には薄い霧が立ちこめた。

(「日本語キーワード英語表現辞典 形容詞編」)

における「薄い」の示す、〈空間的広がりに含まれる組成成分に対して〉〈視覚的に知覚される〉〈量が何かの基準より少ないさま〉という意味特徴によって表される概念である。これは基本義の様子を持つものは通常、その中に含まれる組成成分の量が少ないことから、「隣接性」に基づくメトニミーであると考えられる。そして密度・濃度を表現する場合、「薄い」の対義語に当たる形容詞は「濃い」だろう。

③ 色彩を表現する派生義

派生義③は、〈色に対して〉〈目が受ける〉〈度合いが不十分で淡い状態〉によって構成される概念である。この派生義③への意味の派生は、派生義②の、〈組成成分の量が少ない〉という意味特徴との類似性に基づくものであると考えられる。

(7) 一つは薄い青地に紺と赤のストライプの縁がついた航空便で、その封筒を一目見れば発信人はわかる。
(池澤夏樹「真昼のプリニウス」)

(8) 広げると、うすい黄色にうすいきみどり色をまぜてやわらかくしたような色だった。

(俵万智「りんごの涙」)

(9) 薄いグレーの猫が赤い鳥居を潜ってゆく。

(吉行理恵「雲とトンガ」)

(10) 薄い雪化粧の富士はまばゆいばかりに凛々しく、その山裾を汽車はひた走りに廻っていった。

(芝木好子「慕情の旅」)

例8～11において、「薄い」の表す概念が空間領域から視覚領域へと拡張している点が観察できよう。色彩の淡いことを表す意に転用することがある。さらに、太陽に沈んだ「闇」の状態や「影」は人間の視覚では黒に近いので、一種の色彩としてふるまいをすと思われる。12、13の例からうかがえるだろう。

(11) 先程より少し傾き加減の日光が、プールサイトでたわむれる何十かの体に、薄い影をつくっていた。

(高樹のぶ子「遠すぎる友」)

(12) 街路樹のプラタナスが、黒々としたシルエットを薄い闇に移していた。

(落合恵子「シングルガール」)

以上派生義③における「薄い」は対義語として「濃い」を捉えられる。

④ 光を表す派生義

派生義④は〈発光体から出る光に対して〉〈目が感じとる〉〈度合いが小さいさま〉という意味特徴によって構成される概念である。ここでの「薄い」はどんなふるまいをするか。下記の文例をみられたい。

(13) 空から粉のように降ってくる薄い光を、たちまち海面が呑みこむ。

(高樹のぶ子「追い風」)

(14) 薄い月光の中で恐怖に歪んだ女の顔は意外に老けていて

(井上光晴「地の群れ」)

派生義③の〈色合いが不十分で淡い〉という意味特徴との類似性に基づき、例14、15において、「薄い」は光の弱いことを表す。英語表現の「weak light」を比べてみると分かるように、「薄い」の「対義語」に当たる形容詞は『強い』である。次の16、17のような例が考察される。

(15) あくる日は、朝から雲一つない上天気で、強い日射しが目に痛いほどだった。

(三浦哲郎「ユタと不思議な仲間たち」)

(16) 空は金と銀の砂子蒔絵と申しましょうか、温帯では見ることのできない強い星の光で輝きわたっています。

(林房雄「双生真珠」)

⑤ 聴覚を表現する派生義

次に、「薄い」の派生義⑤は〈声や音に対して〉〈聴覚器官が感じとった〉〈張りぐあいが小さいさま〉という意味特徴によって構成される概念である。

(17) 擦れ違ふとき、彼女の泣く、小さな、薄い声が聞こえた。(http://noblesse.exblog.jp)

における「薄い」は、次元という空間概念から聴覚領域に意味拡張したのも空間の隔たりの小ささと音量の小ささの類似性に基づくメタファーによるものである。ここでの「薄い」の対義語は、例19のように「厚い」と表現している。

(18) ソプラソでこれだけ厚い声を出すのを聴いたのは久しぶり！(http://www2.neweb.ne.jp)

⑥ 嗅覚を表す派生義

派生義⑥は、〈あるものから漂ってきた〉〈嗅覚を刺激する〉〈匂いが淡い状態〉という意味特徴によって構成される概念である。

(19) 僅かに匂うものといったら、やっぱり塩素の薄い匂いだけだ。(http://asahi-net.or.jp)

(20) 最初このログハウスに入った時は、室内は材木の薄い匂いに満ちていた。(http://blackjack.client.jp)

「薄い」が「空間」から「嗅覚」へと意味が拡張しているメカニズムには、類似性に基づいたメタファーが基底に存在しているものと考えられる。このときの対義語は、次に示したように、「厚い」である。

(21) 桃の尻は甘い香を発し、油絵の具の厚い匂いと混ざり (http://www.rose.sannet.ne.jp)

⑦ 味覚を示す派生義

派生義⑦は、〈舌の味覚神経に触れて〉〈飲食物が起る〉〈刺激が少ないさま〉という意味特徴によって構成される概念である。

(22) 油でしおれたポテトを薄いコーヒーで流し込みながら、僕の喰い物はどんどん美味しくなる、と立川は妄念を反芻した。(杉元伶一「就職戦線異状なし」)

(23) 普通のレストランと比べると味が薄い。(http://www.t3.rim.or.jp)

(24) 関西人はタコの歯応えを楽しみながら噛み尽くすことで、その薄い味も味わい尽くしていた。(25) (http://www.nhk.or.jp)

において、例23から例25における「薄い」は「濃厚でない味、またはあっさりしている味」である意味概念を表現している。そして、「薄い」の対義語も「厚い」である。

⑧ 触感を示す派生義

派生義⑧は〈ものに触れて〉〈手や肌で受ける〉〈平たい感じ〉という意味特徴によって構成される概念である。

(25) 細めの繊維で強めに織り上げてあるために生地の風合いはやや薄い感触で、ちょっとベラットした印象です。(http://baby-pro.co.jp)

(26) 保険証が、とうとうカード式に！（中略）診察券よりも薄い感触、いと頼りなし。（<http://suu.pinoko.jp>）

例26～27における「薄い」は触覚を表す用法である。何か薄いものを手に触れた際、皮膚や筋肉が感じた力で起こした触覚である。従って、メトニミーに基づいた意味変化だと考えられよう。

最後に、抽象的な領域における「薄い」のふるまいに対して考察する。

⑨ 感情・関係・可能性の程度を表現する派生義

派生義⑨は、〈五感以外の領域における〉〈感覚的に乏しく〉〈好ましくない状態〉という意味特徴によって構成される概念である。そして、例28～30のように、「薄い」の概念はマイナス表現へと移行しているのが観察されよう。

(27) そんな経営では会社再建の望みはうすい。

（飛田良文「現代形容詞用法辞典」）

(28) 貴方の薄い愛情で育てられた私の愛は、他の人の何倍にも深い自信があるから。だから、愛情が薄いから、上手く愛せないから、そんな理由で別れようなんて言わないで？（<http://love-log.jp/d/220422>）

(29) とにかく琵琶湖の問題は、みんな、大事なものとやということはわかっているけども関心が薄い。

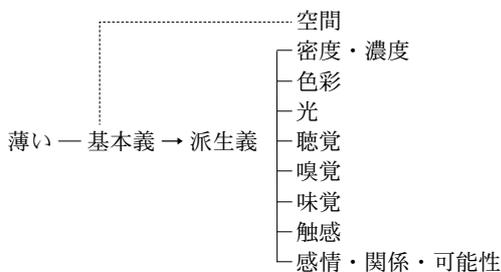
（http://www.pref.shiga.jp/d/shizenhogo/tekisei/giji/kou_mai.html）

以上、「薄い」の多義性に対して認知意味論の立場から分析した。

4. おわりに

本稿では、面状、体状の厚みが少ない具象的なさまを表す「薄い」が、複数の意味へ拡張するプロセスを、比喩による観点から記述した。そして多義語である「薄い」が、どのような意味構造を持っているかを明らかにした。「薄い」の多義構造を示すと、次の図のようになる。（図3を参照）

〔図3〕「薄い」の多義性



注

1. 国広哲弥 (1989) 「五感を表す語彙—共感覚比喩的体系」『言語』第18巻第11号から引用。
2. 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界 現代言語学から見る』から引用。
3. 亀井孝・河野六郎 (1996) 『言語学大辞典』から引用。
4. 本稿における分類は『分類語彙表』(国立国語研究所、1964)によるものである。
5. 謝豊地正枝 (2002) 「共感覚的比喩表現に対する考察—味覚形容詞「甘い」の多義性に対する分析を中心に—」『2002日本研究国際会議論文集』を引用。
6. 国広哲弥 (1989) 「五感を表す語彙—共感覚比喩的体系」『言語』第18巻第11号から引用。
7. 楠見 孝 (1988) 「共感覚的なメタファーの心理・語彙論的分析」『記号学研究8』を引用。
8. 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』を参照されたい。

【参考資料】

池上嘉彦 (1978) 『意味の世界 現代言語学から見る』、日本放送出版協会
 亀井孝他 (1996) 『言語学大辞典』、三省堂
 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』、秀英出版
 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』、大修館書店
 (1989) 「五感を表す語彙—共感覚比喩的体系」『言語』第18巻第11号、大修館書店
 楠見 孝 (1988) 「共感覚的なメタファーの心理・語彙論的分析」『記号学研究8』
 謝豊地正枝 (2002) 「共感覚的比喩表現に対する考察—味覚形容詞「甘い」の多義性に対する分析を中心に—」『2002日本研究国際会議論文集』、台湾大学日本語文学系
 中村 明 (2004) 『感覚表現辞典』、東京堂出版
 松村 明 (1991) 『大辞林』、三省堂
 頼 錦雀 (2005) 「日本語感覚・次元形容詞の意味拡張—共感覚的用法を中心に—」『日本語次元形容詞の研究』、致良出版社

きゅう びてい／台湾大学 日本語学科院生